北槎聞略

巻十

和書門 類
一八三〇一 號
一七八 函
二 架
一〇拔二軸一二 冊

内閣文庫
和書 類
一八三〇一 號
一〇拔二軸一二 冊
一六五 函
一一 架
（〇一ガ）

内閣文庫
番號 和 18301
冊數 24（10）
函號 185 579

国立公文書館
National Archives of Japan

書籍館印
日本政府圖書
浅草文庫
内閣文庫

北槎聞略巻之十

物産

魯西亞國氣候沍寒にして其土乃産する処の動植の物品類甚多からず此に載する処のものハ多くハ他邦より致し植置くものなりといふ此他奇種異産は見る人ありて或ハ漂人等

三尺の小に満ざるものといへども物名
形状を詳にせざれば疑を生ず
よし然し只その目撃(もくげき)憶記(おくき)し
たるもののみを記し誠に掛漏多き
ありといへども纔に此数十種に就(つい)て
其風氣物産の概(がい)を知るに足れり
よりてこの述説(じゅつせつ)するものを輯(あつ)めて
物産部とす

○草

菊(きく) 水仙(すいせん) 蜀葵(あふひ) 錢葵(ぜにあふひ) 胡枝花(はぎ) 茅(ちがや) 薊(あざみ)
鳳仙(ほうせん) 紫藤(ふぢ) 牽牛(あさがほ) 石竹(せきちく) 是等は皆此方
のものと同じ 石竹は俗になでしこ 石竹と
稱するものなり 窪を岩に堀りて之を植
虎耳草(ゆきのした)これは
本朝より種を傳へしといふ この種は
漂着せし 船中 什器に植つけたる

種ハ無し

アゴテ　アミシヤツカ　カムシヤツカ等ふ多し

葉ハ細(こまか)にし茎(くき)ハ蔓(つる)のごとく地上にはひ
節(ふし)ごとに根をさせり子ハ麦門冬(じやのひげ)のごとく
ちいさくまるく青黒色にして八月頃熟(じゆく)し
たるをとりて桶(おけ)につけおき冬中菓子(くわし)
とすこれを食へハ舌(した)唇(くちびる)ともに紫(むらさき)に
染(そま)るといふ

酸醤(ほゝづき)　苗ハ山胭脂花(おしろいばな)のごとく多く枝椏(やまた)を
生して藜衍(りんえん)す子ハ此方のものと同
じくよく熟(じゆく)してうるをとりて菓子とせ
ず食ふ先太夫此方の児女のごとく
わらひのごとく瓢(ひさご)をもてふきならし
てもてあそぶ事ハなかりしとぞ又より
一般(いつぱん)にもなかりしとぞ

綿花(わたはな)　支那(から)より種を伝へ紀れしも又実

地わりなる生育せさるなし盆に植て
愛玩するものなり
牡丹　パウロシモノアチコーフ　と　ムーシシプーシ
きこりが家に盆種の着あり花痩て
高くなり
芍薬　多く園に植て花を賞す但
此方のものに比すれば高痩して花も
美しからず

蘠薇　野生多し　紅花のものをとり
酒に醸す農家の女子に花を摘籠に
入れ都下に持出てうる
烟草　彼方にても　タバコーといふ　ミシビリにて
多く作る葉は此方のものより小なり
八月末又は年によりて雪ふる故大抵八月
の初にかりて乾をいれて元冬の実
ならを乾きたる色黒し　プート　四貫五百匁　にて

價七八十錢より二百文に至る

番椒 アスタラハンシツペーレツといふ乾したるものトレツコイより來る生なるハたま〳〵魯に植うるを見るのみなり

按るにアスタラハンハ亜私太蠟罕之北高海沿岸の地なりペーレツハ胡椒を云なり亜私太蠟罕の胡椒といふ義なり辛み少し高麗胡椒南蛮胡椒なども皆同意なり

薑 インビリといふムーシンフーシキンの家に盆に植うるなり乾したるハ多く満州より來る

甘蔗 サーハランイタラワといふ是も都下にて好事の者鉢に植おきたるを見ることあれど

アナニス 葉ハ挟長にして厚く薊の如く刺あり地より叢生し葉中に茎を抽で花なくして實なともいふ大さ拳ほど

如く色黄にして鱗甲あり状松毬の
ごとし実の中心より又茎を出し葉
を生ずその茎を摘て地に植れば根を
生そだつとなり其実三年にして始て
熟すを味甘酸にして極めて美なり
其国にても貴重し一根の價銀十五
七枚皆都爾格より出す処なり國王
の花園に栽ゆるものは許に植地を五六

尺四方に堀かくらに馬糞をつめて其中に
許を埋み上を玻璃版にて覆しおくときは
総て珍奇の花弁寒をおそるゝものは
皆玻璃にておほひおくなり

按ずるに臺灣府志に黄梨葉似蒲而短闊
兩旁如鋸齒其實色黄瓤如鱗甲形似
甜瓜味甚甘酸清芬襲人一名鳳梨といふ
との是なり琉球にて榮蘭といふ類なり

覆盆子 其子白赤黄黒四種あり大なるハ
雞卵の如く味ひ甘美之汁を取酒に醸す
葡萄 ビノガラートといふ鉢に植室内におき
昇降管にて冷暖をはかり火候を
かましくして花ハ四季ともに花
実る
茄子 盆に植て愛玩す紫茄白茄の
二品あり

胡瓜 ヲグルチイといふ此方のものより
小なり生にて食し又塩蔵し貯へ
冬の備とする
甜瓜 デニといふ此方のものより大なり
されども多く産せず又シビリといふハ
一個の価百五十文都にてハ六七十文なり
西瓜 アルブーヂといふ此方のものより小也
甜瓜よりハ貴し二三月に種を盆に下し

五六尺に長ずるまでハしらをかきて茂し
六月に至りて脱して圃に移す
豇豆 ゴロといふ白赤斑三品あり角ハ長
短二種あり多く圃に種て食料
とす
蘿蔔 レーテカといふ此方のものよりハ細
小なり生にて牛乳と塩とをつけて食
煮ても食ふ其味ひよく辣し

按ずるに北征録に沙漠中の沙蘿蔔甚
根細く味辣し又岐生者をも
載す魯西亜の産も沙蘿蔔の類
なる由し
蕪菁 アレーハといふ根ひらたくして此の
方の天王寺蕪といふものに似たり生に
ても煮ても食ふ ヲホツカに産するもの
絶て大なるもの一箇の重さ三百五六十匁を

まいふ
胡蘿蔔 モルコーフといふ根ハ大にして
味ひかろく甘美なり生にても煮ても
食ふ
萵苣 池に植て茎ハ四時ともにあり
只貴人の饌に供す
紫蘇 多く圃に植て子を食ふ
カルトウス 今此二ヶ所にてジヤガタラ芋五斛芋

清太叉ハもと称せるもの苗高さ一二尺
葉ハ七八葉槐葉に洗して但参互して
對生せり夏淡紫花を開く茄花に
似て小なり根ハ土圞兒に似て僅に
多く子を生ず大なるハ鶏卵のごとく
小なりハ弾丸のごとし煮食へハ味ひ
甘美なり又葛粉の如く製し貯
ふれハ民用に利あるものなりかの

邦人の植て食料(しよくれう)に充(あ)つ
梅の木に似て近来(ちかごろ)和蘭(ヲランダ)より種(たね)を伝(つた)へて
今処々に多く植移しを蛮呼アールド
アップルといふ或ハアップルと称する
処もあるなり
葱(ねぎ) 此方のものより小ぶりにして 胡葱(あさつき)の
如し
玉蜀黍(とうもろこし) 多く圃(はたけ)に作り中小児の好む所
分ちふ
罌粟(けし)
粳糯 並に此方のものと異なし
稲(いね) ピセナといふ本地に絶えてなしブラジ
り我邦より三年前種(うへ)を試しに草生(さうせい)
のよろしく子を生ぜざりしとなん
大麦(おほむぎ) アリセナといふ小麦をセナといふ
いづれも此方のものに劣れり 彼邦

常食の物な夥しく作りなされ
ともキリギより東の二方にハ多く産
せり
蕎麦 ギリチウシナといふシビリにても多く
作る四貫五百目ほど七十錢計なり
麼りて飯となすも
牛蒡 野生多し食料とせるもの
圃にうゆるゝものなし

○木
松 ソスノーイといふ此方のものと同し
伙多産せり
海松 ケトロニカといふ子をヲレキといふ常
に菓子となす 食ふイルコツカ邊にてハ
四貫五百目にて七八十文より都にてハ
銀十二枚なり
落葉松 是をともソスノーイといふ甚多し

屋室および船材とも皆此木をもちゆ
樺此木も甚多し　ペレリといふ車軸車
輪かしこ桶の箍に皆此木をもちて造る
又釘にも用ゆ
大葉櫟　此方のものに同じ　但大木なし
樅
檜　二品ともに街に植るを見えたり
橙　此木多く　河岸に生ず　外の麁皮
をとり内のうは皮をとり皮革を染る
赭黄色にて甚見事なるものなり
柳　ターニンカといふ是もまた多く河辺に
生ず　細條をとり刑鞭に用ゆ　又灰に
やきて梟燭に加ふ
黄楊
棕櫚
茶梅花

柚　アピリシンといふ此方のゆずより小く

柑　リモンといふ処々に植し珍花

ことに都へは夏の間和蘭陀を和蘭より

船にて長崎へ送りきたれるをシビリヤ

辺には絶て見ざる人多し

梅　此方のものに劣れし　多く得らるし

官富の人の園中に植るのみなり

櫻　ベレソといふ花は八重にて大輪なる梨

子は此方のみかんのより大なり蜜柑橘

にうけて菓子とすもよし熟しきらは

生にても食ふ　カムシヤツカ迄の櫻は花

実なし

銀杏　許に植しかど子ありなしを志りて

本朝より子を結ふさしをにも信用せ

ずしてありけり

桑

木槿
躑躅　并に北方のことのふれしはくしは
花小なり
山梔　北方にあれしものの花単葉千葉二
品あり
茶　朝鮮より来るものは寒気に
みな成長せず
金剛纂　ブシの家に盆に植てもてはやす

今度始てキリ呂にわたりしとて

○鳥
鸛　鸕鶿　鷹　告天子　雀　鷺　鵝　雉
雁　鳧　此等は皆北方よりあれし但鳧雁
のるは春の末に南方より帰りきり夏
中影して卯をうし雛を育こと多く
家にかふものは卯をとりて食
料とす

青首鴨(あをくびかも)に似て冠(とさか)し嘴(はし)し赤きものをば
島夷これの皮などにて衣となせるに
他の諸鳥の皮よりも強くして破れ
ずとぞ
鵝(ろう)
シビリのかたにては此二方のうちひとつあれし
エカテリンボルグより西の二方歐羅巴(ユウロバ)の地に
へきいは皆胸より腹までも灰白色(くわいはくしよく)にして
肩さきも白し純黒(じゆんこく)なるものは絶て
なし其の状(かたち)も小なりといへど
鴿(いへばと)　ゴロブといふ家に多し其他
鷭(けり)　ヲリヤウといふ國中甚多し極めて
大なるものなり
雞(にはとり)　雄(をどり)をペトハといひ雌(めどり)をクウリツといふ
マコーツカより西の方は多し家にも其
食料とすヲホツカよりカムシヤツカの邊
には甚まれなり又都下には矮雞(ちやぼ)其

大さ雀ばかりなり
按ずるに臺灣府志に使槎録を引て
五鳴雞大如鵪鶉といふものあり
同し
吐綬雞 インセリカといふ貴人の家には
多く畜ひおきて食料とし味ひ至て
美なり イルコツカ國邊にてハ一隻價三百
文計なりとそ

鶴 ジユラフといふ鶴鶏丹頂其外種々あり
但食料とせす
孔雀 パウレンといふ都にはもつとも多く家に
畜ふ
鸚鵡 五色なり白色のもの殊に貴
し官富の家多くこれを畜ふ孔雀
鸚鵡皆他邦より来る中土の産にあら
ずといふなりとそ

角鴟 此方のふくろふなり 小児の声にして
鵂鶹なとも

鵲に似て尾長し 背より尾まで璐色に
して 頂白く胸黄褐色にして 腹白き
鳥なり よく教れは人語をなすといふ
桜なに此方にて 山鵲と称する物也

燕 五月頃より八月ころまでなり 家々の
軒に椽なきには 板を吊りて巣を造ら

さて光太夫キリロに問けるに雁は春の末
より秋の初までは此邦に帰り秋より
春までは東南の諸国に渡り行なり 我
國と此邦とは雁のみなる時節相反せるに
燕は何方に行を問しに来る秋冬に来れ
問は何れより出て来夏のうちに渡り
来るやも尋ねれは燕は他邦に帰ると
ものなれはかしこも真思しけて深山の

木の空なきハ土穴のうちに蟄するとそ
おもハれ侍る。貴國ハ此邦ハ同時にもあれ
燕雁鳥の類の南北に往来するやう
におもはれしかとも詳りしなれと
按するに晋書に百姓饑饉野無生草時或ハ
掘野鼠蟄燕而食之といひ文昌雜録にも
因京東開河岸崩見蟄燕無數ニ中を
載られハ土中に蟄する事疑なし此方
にても深山の洞穴にて蟄燕をみ
しことなし杜鵑の蟄しけるとも掘出せる事
聞けり

○獸

牛　牡をブーカといひ牝をコロワといふ此方の
ものに異なる事なし彼邦にてハ重を
負ひ輿車を挽しめ又ハ耕作の
用に供せしむ只食料に充るのみなり

家ごとに多く畜ひ乳をとりて子を育せしむ。又冬には牡牛をとりて食ひとし牝牛を殺さず。皮は諳厄里亜におくりて製せしむといへり。

馬　牡をコーニーといひ牝をコブラといふ。但都よりトムスコイまでは皆栗毛を見る絶く白馬をめづらしとてシビリにては白馬をも用ひ都下にては諳厄里亜の馬を貴ぶ。

皆尾を短くきりて猿くしるものもて見ゆれさるらへは甚おかしき事なりといへり。

羊　バランといふ。黒白斑數種あり。毛はかりとりて織物とし肉を食料に充つ。されば民用に利あるものなれば家ごとに多く畜ひおくなり。哆囉呢を羊の毛にて織る。羊毛を紡ぎ投梭にみかりたる織りてしたる時は常の綿布の

いとしなて毛あらきは水をはじき毛の剛き
剛毛をすりたゝみおけば毛起りて立
なり

野羊　コヂヤウ又コズリヤマヒツジといふ
此はわが国にはなし食料と為す彼邦にては
牛馬羊の類夏の間は野にはなちおき
自ら食をあさらしめ児子をも育せしむ
冬来れば枝をもて代倍し　かこひのうちに囲

ふ内にいれかうかひ冬は家にてつなき飼
ひて秋草夏の内に草をかりおく
荊をまでもかゝふなり

ヲレン　状ハ麁る大さ馬のごとく角扁く
滑にして鹿角の如く癃瘻あり
毛色は鹿の毛のごとくにて白斑の
数種ありわつかなれど人に馴れ家に
なりて蓄ひおきて車橇なとをひかしむ皮は

内閣文庫

裘に造らするところ燈なりしとぞ
按ずるに此地カラフト地方のことにや
あり 夷言にツナカイといふ和蘭にては
レンシデイルといふものなり 乾隆御製文集
に 堪達漢者出黒龍江似鹿而大爾雅
釋獸所謂麋麉者也といふ 云寧古塔将軍
已靈阿奏進東海使鹿部所産馴鹿勝
負載似牛堪乘騎似馬依媚於人乃又

過之まし 夜譚随録に李因言其客喀
爾喀時其人騎獸似鹿而非也又曰似麋
而大者曰堪達爾汗疑其即麉也と所謂
馴鹿は即堪達漢なり 堪達爾汗といふ
ものもまた其轉語なり 是もおなしく
ヲレンシなり 再ひ按ずるに沈存中筆談
に北狄有駝鹿極大而色蒼黄無斑角大
而有文堅瑩如玉といへるも亦此物ならん

盛京通志にハ堪打漢に作れり

ズバ マコーツカの最北氷海の島にて拾ひ
得る海獣の牙なりとし大なるハ二三尺
小なるも一尺計もあると器用に製
するに瑩白なる由象牙にまされり
此物にすこしもにたる一角を拾ひ得る由
あるといふ但其獣の形状を詳にせず
按するにゼヲガラヒと云韃靼海 即氷海なり 濵

り異獣ありベヘモットと名付く其歯
甚大にしてかたくありて磨光
して器に造ハ潔白にて美なること
象牙にまさるなりと又大明一統志に載
る所殊角即海象牙といへるも是
即此物なるべし

鼠 大なるをキリースといひ又ミーシといふ
人家にも田野にもあり 但此方よりハ一[illegible]

おし

家猪 シビニヤンといふ黒色灰色白斑あるを
貧賤の家にてもこれをかひおき専ら
食料とすされども牛肉のごとく多く
食せず

狗 ソバカといふ大小数品あり家にかひて
門戸をまもらしむ又カムシヤツカ コホツカ
のあたりにては橇車等を挽しむるの能
道路方位を弁じよく人語を解すと云
ものハ一隻のあたひ銀二十枚計なり

駝 是リベルーダといふ イルコツカより西の方
にハ多く畜ひて此方の牛馬の如く
負載の用に供するなり毛いろハ多く
灰いろ栗いろなり頸長く脚たかく
背上の肉瘤の如くに隆起して鞍を置
たるごとく一瘤ハきさけれハ人のるもの

なり性尤よし人に馴るゝハ牝の牝牡交
まはりをなすれハ大きさにいたりて勤されハ
人を損ふ事あり常ハ甚おとなしく
小児らも自在になりうるを都にも多く
あらゆるもあり

猫 牝をコーシカといふ牡をといハヨコーシカといふ
此方のものと異れりキリロフ方に支那
より来りし猫ありとて毛の長さ

五六寸計りもて繪に書ける麝香猫とい
ふものゝ如しけるを嵌しハおきてありし是ハ
甚まれなるものにて都にもあら
ざるものなりしとぞ

猫 按ずるに毛の長き猫といふハ即獴獪なり
無し

獅 レーフといふ本国の深山にハなきよし
これもまた甚たけきものなりとて

珍しからぬものなれとも

熊 メヂヱヂといふ 灰黒色にして絶大なり 胸前の白毛なし 黒色のものハ甚稀なり 手傳の者にはらふ價銀二十五枚ばかりといふ

野猪 ヂイコイカバンといふ 此方にいふものゝ也 なれし 都ニハ大さ鼠ばかりなるを樊籠に入て養ひおく 本國の産なり

といふ 先太子ハ外國の帝持物ならんとて三隻まで養ひ置れしも途中にて皆死しうせりとぞ

狐 リシツといふ 此方のものにかわりなし 又アクラシツコイより玄狐を産す 價もつとも貴し 其外白斑あり

猿 都にてヲヂベヤンニマーといひ シビリにてハオシカといふ 此方のものにかはりもなし

長尾のものあり鼠の尾に似たり

兎 ウシカンといふ白灰褐斑数品あり栗

都りハ大さ鼠ばかりなるものあり是

愛すべきものなりといへど

貂 ソーボルといふ状鼬に似て尾長く色

黒し 赤みを帯なるハ下品とす高

貴の人ハ衣服に用ゆ 背の皮を男

子の服に用ゐる腹皮をハ婦人の服に

裏に用ゐる都てハ上品なるものの一枚

銀百二十枚下品なるハ六七枚あり

栗鼠 ビヨウカといふ一枚十四五文あり賤人の

衣服に造る

ゴロナスナーレ ヨホツカ マコーツカの間山中に産

す即銀貂なり 俗に銀鼠といふ 純白にして尾先

黒し 又斑なるもあり 尾ハ国王の着

用らる 江バといふ袷の襟の飾として

海豹 子リッパ 肉の味甚美なり 脂をとりて
其履の底に塗ときハ志めらずして足
をいためず 冲なりしとき皮ハ嚢に
造りて旅中の衣服等を入る料
とす これをチマンマンダといふ
海獺 ボーブラといふ アミシマツカ島の邊
にてとる 本國の巨商チガレーフ等
甲斡をなし おきもと交易して皮一

張を烟草四五葉に易あたり これを本
國に送りて都尓格と交易するに上品
なるハ一張價銀八九百枚 下品なるもの凡二
三百枚ゆへにこれを都下にてハ上品なるハ
銀百七八十枚 カムシヤツカ島にてハ銀五枚計
なりといへり
海驢 シブチといふ 肉の味はなはだ美し
皮ハ船に造る その絶大なるハ牛よりも

大なりとぞ

○魚

鯨（くぢら） キト 大小数品あり 島夷等ハ食料とし油をとりて燈（ともしび）に點（てん）じて本國にも含りて光太まにアミシイツカへ差（おく）せし年の冬一度に七頭とりしことあり

しとぞ

大口魚（たら） タラスカといふアミシイツカ邊に多し島夷の常食なり

スタチキイ 此方のあいなめに似たるものなり 大さ一尺計 四月より七月迄多くあり 是も島夷の常食也

魟（えい） 島こにあり されども多く得がたし

鰈（かれい） 島こに多し 捕れども食料にする多くありとぞ

蝦（えび） 小えびのみにて 龍蝦（いせえび）の類なし

河豚に似て長さ五六寸計なる魚にて腹に
鱗のいぼの如きものありて海浜の石に
つきゐるなり 其名洋語にてヒテリーカ
石の涯ありて刺 煮食ふに骨脆軟にて味美也
箱館に多し 此もの松前にてゴッコといふ水戸の浦にて三五郎といふ

鮭

カラスノイレンバといふ カムシヤツカ チギリ
ヲホツカ ボルセレツカ ペトルガヲニ イチガ等に
多し 四五月のころよりとりて食料

として塩につけ乾腊となし冬の儲とし
なを八月末すにおひのほりし河上に
おしのぼり河の一ところにみちふさがりて
死をさかのり夥しき事かぎりなし其沢
みは下流の水臭気ありて飲べからず
チブチヤ 又チヤブチヤといふ鱸に似て長さ四
五尺 鰓ありて臓多し カムシヤツカに多し
四月末に海より河に溯りて渓に多く取

て食料とし又冬の儲に貯るなり
此物都下にてハ甚賞翫し好事の人ハ
持運び通商の者ハ往々あり又官
人あふたよりもとめしもなりて珍味と
称し客に供して誇る事なりとぞ
バキリチイ　小魚なり鱗なくして背に刺あり
五六月のころ海より河にのぼりて河の一
面に黒みかゝり尺足らずにも群来る

女の手わざにて網もてあみて葱皮を
去りて食ふ味よろしく美なり
桜の小蝦夷にてロコムといふものなり
イカラ　状鯉に似て色青黒し大さ四
五尺其頭色黒くして味極めて美
なり　エカテリンボルグより出る名品とす
冬のうちハ生にて都下に送る塩蔵
もし焼餅につけて食ひ又胡椒を和し

下酒(さけのさかな)といふはイルコツカ辺に産するものハ
鰤の色赤くして下品なり塩(しお)につけ
桶(をけ)につめて諸方に輸(ゆ)し大いなる交
易をなすといへり

桜りにゼラガラヒといふステウル魚其子を
カヒアルといふ魯西亜(ロシイヤ)語にてイクリといふ
多く諸邦に販賣(はんばい)し廣大なる交
易をなせり一年和蘭(ヲランダ)の人一人にて

八萬レーキスダールデル（金銭の名掛文等詳ならず）のイクリ
を買たる事ありしといへりイクリを
イカラの精泚なり

鯉(こい) 甚まれなり 都下の官富の家たま
く放生池(ちやうせいち)にやしなふものあり食料に
もちゆる事なしといへり

鮒(ふな) カラーシといふ ヲホツカ ヤコーツカの間に
多し 都下にもあり 味(あぢ)よし食料

るなりと
イルコツカのバイカル湖に魚あり大さ二三尺
鯉に似て鱗白く肉の色も白し味
甚美なり極めて肥たるものハ凡
一頭おもさ八九貫に至る価銀十枚計
なりまた鰊に似たる魚あり多くとれ
て食料とすれども亦甚賤し
二魚ともに其名を詳にせず

海膽 アミシマツカに多し北方のものハとんと
おほくとれて其を食料とする彼國ハ多く
海に遠き地なれバ介の類甚まれなり
今ハ蝦夷地へ来りし魯西亜人等も
介の類をバ甚珍らしがりて石決明
拳螺の殻までとりかへりて多く
持帰りしとなり
○虫

蟾蜍　ヤゴシ
赤蛤　カラスノイマゴシ
蜘蛛　ミツキリ
蛇　ズメニマ　甚だまれなり漂人等彼邦に至
るうち只二夜見たり好事の者薬
水に漬貯へおきて珍玩すと
蜜蜂　ミヨートといふ大小二品あり小なる
ものを上品として国中処々にこれを畜ふ

就中ヱカテリンボルグにて多く畜ふ一家
にて八百籠ほど畜ふ者あり春秋二度
蜜を割その時ハ窠の口より火を焼べハ蜂
一処に集りて動かず其内に窠を割て
蜜をとれど村僻の者ハ砂糖にかへて専ら
夜日と常に食として又此方にて酒を
のむごとく水を和し温めて飲物
として桶に入おきひとしくありし

ごとし

胡蜂

蚊 コマラといふ此方のことばにおなじ ヤコーツカよりヨホツカまでの間には昼夜となくおびたゞしくむらがり行旅の者氈笠を戴き笠の上より紗をたらし造りたる袋をかけしあり しからざれば目口鼻に入て堪がたしとなり

虱 フセイ

蚤 ホローハ又ドロト

蝿 モーハ

蝶

蜻蜓 是ホ皆此方のものとおなじ ことより土地温寒をかねたる虫の類はすくなかりし

○金石

金銀銅鐵錫鉛汞鋼皆あり
銀銅もつとも多し
ビリマン 金剛石なり 此物はなはだ得難き
ものなれば至而彼邦にて貴
重し 國王の冠ヲルデ 服色の部に詳なり 戒指に
皆これをちりばめ飾り 諸官のヲルデも
此石の多少にて品級をわかつなれば
麥粒計の大きさなるもの其價銀千枚に

およぶとぞ
ムラここ 質白く 紅緑黒の斑文あり 其
緻密にしてかたし 屋室を造り 諸器用に
製す エカテリンボルグより産す 紅緑斑の
ものを上品とし あるひは貴し 純白
なるものをもつて 石人を造る 都下
には和蘭より 船にて多く載来る エ
カテリンボルグよりは遠路にして運送不便

なりとも大きなる石ハ出ることまれなり
梅ヶ小郎 大理石なり 其外肥後の
白嶋石ハ此類なり
雲母 シリウタといふ ヤコーツカより出るもの
甚大ならしと 上品なり 障子窓のあか
皆雲母をもてする玻璃版よりも能く且
破れやすしともありてよし価ハ四五
すんなりなる小なるものハ百文よて四十

文より七十文もうりまでそのうのハ大なるハ方
一尺四五寸なるもあり 一枚まで銀四五まい
なり 此外石の類種々あれども心ある
ことを見過しぬれ 記録せざること
なり

内閣文庫

[illegible]